ICU過去問(国際基督教大学入試過去問)
2016年度　人文・社会科学
＊ ICU に入学を希望する受験生の学習のために公開している資料です。
(This is NOT the official Exam.)

# 人文・社会科学

## 問題冊子

### 指　示

合図があるまでは絶対に中を開けないこと

1．この試験は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができるかを調べるためのものです。
2．この冊子は前半が資料で、後半に**40**の問題（**1–40**）があります。配点は**80点**満点です。解答カードには表裏あわせて 50 の解答欄がありますが、41以降は使用しないで下さい。
3．解答のための時間は、正味**80分**です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 80分をどう使うかは自由です。
4．解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えの記入のしかたが指示どおりでないと、正解でも無効になります。
5．**答え**はすべて、**解答カード**の定められた枠の中に**鉛筆**を用いてマークして下さい。それ以外のところに書いたり、また答え以外のものを書きこんだりすると無効になります。
6．一度書いた答えを訂正するには、消しゴムで**きれいに消してから**、あらためて正しい答えを定められたとおりに、はっきりマークして下さい。
7．メモには**この問題冊子の余白**を用い、ほかの紙は使用しないで下さい。
8．「解答やめ」の合図があったら、ただちにやめて下さい。試験監督が問題冊子と解答カードを集め終わるまでは、退室できません。
9．この指示について質問があるときは、試験監督に聞いて下さい。ただし問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答カードの定められたところに忘れずに書き入れること

（余　白）

1

明治の作家、樋口一葉が書いた作品に『わかれ道』（明治29年発表）という短編がある。主たる登場人物は傘屋の奉公人である十六歳の吉三と、二十歳くらいの縫い子のお京である。二人はまるで姉弟のように仲が良い。「お京さん居ますか」という吉三の呼びかけで始まる物語は、ほとんどがこの二人のポンポンと息の合った会話で進んでいく。ところがお京のとある「選択」を巡って二人は決裂し、最後は涙を目に溜めた吉三が、引き留めるお京に「お京さん後生だから此肩の手を放しておくんなさい」と告げて、唐突に物語は終了する。その唐突さをもってこの作品の完成度の低さを指摘する声もあるが、言い知れぬ読後感の悪さこそ、作家一葉が意図して創出せしめたものと読むこともできるだろう。最後の最後まで二人がかしましく会話をしていたからこそ、その唐突な終わり方とその後永久に続く沈黙の対照性が、シンと読者の胸にからみつく。振り払われたお京の手は行き場をなくし空を泳ぐ。その残像と共に、あれほどまでに仲の良かった二人のぷつりと断たれた関係性が読者に迫る。

物語は吉三とお京という、［ア］二人の若者の間に乗り越え難く横たわる、理解不可能性の淵を覗き込むよう読者を誘う。共通理解が育まれそうな二人なのに、饒舌の裏で肝心なことは何一つ語られず、結局二人は互いを深いところで理解しない。この相互理解を妨げる「語りえぬ言葉」こそが、一葉が表現しようとしたものではなかったか。確かに物語の舞台は今から130年近くも前の時代である。だが明治維新の頃から始まったメリトクラシー（能力主義）のアイロニーを的確に捉えるこの物語は、時代を経て格差が広がった現代社会においてますます重要な問題提起をしているのではないだろうか。

ではこの物語で何が語られていないのかを丁寧に見ていくことにしよう。吉三は傘屋で働く少年である。歳は十六だが、見た目十一かそこらにしか見えず「一寸法師」と仇名されている。「一寸法師」と言えば現代ではお伽話の一つとして知られるが、鎌倉時代末期から江戸時代にかけて成立した『御伽草紙』に収録されている「一寸法師」は、今日知られるそれとは少し違った物語である。年老いた夫婦が子供がないことを嘆いて神に祈ったところ、子供が生まれた。しかしこの子は成長しても身長が一寸（約3センチ）にしかならなかった。夫婦は気味悪がって、この子を捨てようと話し合った。一寸法師はこれを耳にして、自ら旅に出ることを申し出る。彼は京に上り、お屋敷で奉公することになる。ある時、宰相の娘と旅をしているときに鬼に出くわし、これを退治する。鬼の持っていた打出の小槌を使って、身長を大きくした一寸法師は、娘と結婚して出世する。「一寸法師」の物語はこのように、ある種の障がいを持って生まれた子供を疎む親と、親による子捨てという重いテーマを含んでおり、そういった逆境を乗り越えて立身出世を成し遂げる成功物語である。

今でこそあまり聞かれなくなったが、江戸時代「一寸法師」は背の低い男性への謗りの言葉、差別用語であったという。『わかれ道』もまた世間から誹られる者の「出世」を重要なキー

ワードとした物語で、『御伽草子』の「一寸法師」を［イ］の一つとすることは疑う余地はない。吉三は物心つく前に親に捨てられ、当時の「三大貧窟」であった新網地域で芸を見せては日銭を稼ぐ路上生活者であった。親の顔を見たこともなければ、兄弟や親類に会ったこともない。傘屋の女主人に拾われて職人となったが、出世を目指してがむしゃらに働いているかというと、そうではないところが吉三が元祖一寸法師と異なる点である。打出の小槌のない現実に生きる彼は「己れはどうしても出世なんぞは為ないのだから」と斜に構えている。心配するお京は吉三をなだめすかし、自分が出世したら高級品の色織の着物を作ってあげると約束したり、様々に吉三のやる気を引き出そうとするが暖簾に腕押しだ。自分は傘屋の職人が関の山、「誰れが来て無理やりに手を取つて引上げても己れは此処にかうしているのが好いのだ」と吉三は強情だ。

それも道理、吉三が求めているものは出世ではない。彼はお京に向かって、「母親も父親も空つきり当が無いのだよ、親なしで産れて来る子があらうか、己れはどうしても不思議でならない」と、しきりに存在不安を打ち明ける。そしてお京に「弟といふを持つた事は無いのか」と訊ねたり、「お前のやうな人が己れの真身の姉さんだとか言つて出て来たらどんなに嬉しいか、首つ玉へ嚙り付いて己れはそれぎり往生しても喜ぶのだが」などと言い募る。「今のうち死んでしまつた方が気楽だ」と言ってみたり、もう一年生きてみたら本当の親兄弟が現れるのではないかという期待も捨てきれずにいる。彼にとっては出世よりも家族の方が手に入れたいものなのである。世間の差別を日々受けながら、肩肘張って「町内の暴れ者」として生きている吉三は、そんな自分を無条件に愛してくれるはずの家族との邂逅を夢見て、その場から動けずにいる。だが吉三は「無条件に愛してくれるはずの家族」にそもそも捨てられたのではなかったか。「一寸法師」の物語とも共鳴するその冷酷な事実に、吉三は対峙できずにいる。

そんな吉三にとって、姉のように接してくれるお京は唯一甘えられる存在であって、彼はお京との間に擬似的家族関係を築こうとする。出世しなかろうが、乞食だろうが、無条件に受け入れてくれるような家族像を吉三はお京に求める。だがお京はそんな吉三の思いを否定する。「私が少しもお前の身なら非人でも乞食でも構ひはない、親が無からうが兄弟がどうだらうが身一つ出世をしたらば宜からう、何故そんな意気地なしをお言ひだ」と彼女は励ます。だが吉三は「下を向いて顔をば見せざりき」とある。擦れ違う二人の思いが、交わされぬ視線によって表された場面である。

お京はなぜ吉三の思いを受け止めることができなかったのか。理由の一つについて「出世」というキーワードから考えてみたい。吉三が拒否した「出世」であるが、お京にとってはまったく違った意味を持つ言葉であった。樋口一葉がこの時期に書いた作品群は、多くが吉原界隈を舞台とする。それは一葉自身が母と妹を抱え貧しさに困窮して、なんとか日銭を稼いで暮ら

した地域であった。彼女はこの地域での人々の暮らしや、特にそこで体を売って生きる女性たちの身の上をつぶさに観察し『たけくらべ』(明治28年－29年) や『にごりえ』(明治28年) といった作品を書いた。『たけくらべ』には「御出世といふは女に限りて」という言葉が出てくるが、そこでの「御出世」とは、遊女たちが性的身体の自由を手放す代償に金や花魁(おいらん)の地位を得ることであり、吉三が言うところの「出世」とは似ても似つかぬものだった。遊郭の花として人気を博し金持ちの客がつくことは、花魁自身の自由、つまり遊郭の外への脱出を意味しなかった。吉原の周囲には深い堀が巡らせてあり、それは「お歯黒どぶ」と呼ばれていた。『たけくらべ』の冒頭部にも「お歯黒どぶ」への言及があるが、当時の読者にはよく知られていた事であったためか、詳しい説明はついていない。これに比して、現代作家の川上未映子は『たけくらべ』を現代語訳した中で、「そのぐるりを囲むお歯黒どぶ、そう、遊女が厭になっても何があっても逃げられないようにと掘られたどぶ」と言葉を足して解説している。「御出世」を果たした遊女らは、『たけくらべ』に登場する花魁の大巻のように、豪華絢爛な着物を着て小遣い銭も豊富に持つかもしれない、だがそれは彼女たちが体で稼ぐ金を遊郭が吸い上げた中のほんの一部に過ぎず、彼女たちは遊郭の財として統治管理され「検査場」で病気の検査をされる存在であった。借金を返し終わる年季明けで吉原を出られる遊女はそう多くはなく、過酷な労働と低栄養や病気のために命を落とすものも多かったと言われている。

お京は遊女ではないものの、贔屓の旦那に針仕事をもらうぎりぎりの状態であることは、その後の妾口の斡旋からも推測できる。吉三が来ても針の手を休める暇がないほど経済的には逼迫している。吉三はお京に家族があることを指して「お前さんなぞは以前が立派な人だと言ふから今に上等な運が馬車に乗つて迎ひに来やすのさ」と軽く語るが、だったらなぜ今お京がこのような困窮状態にあるかということには思い至らない。そこにお京が吉三の思いを受け止められなかったもう一つの理由がある。家族があっても、お京にとってその家族は、吉三が理想化するようなものではなかったのかもしれない。『たけくらべ』の主人公の一人美登利は、まだ幼かった時に姉の大巻と共に遊郭に売られたという設定である。娘を金づるにする親を描いた一葉は、自身も兄に経済的援助を断られている。「親が無からうが兄弟がどうだらうが身一つ出世をしたらば宜からう」というお京の言葉は、家族に対する冷めた感情の反映であると共に、吉三への精一杯の励ましの言葉だったのではないか。

吉三を理想主義者、お京を現実主義者とする意見もあるが、それはあまりにも単純化しすぎている。お京にしてみれば、身一つで己のために己の生を誰にも管理されずに生きられる吉三は、ある種特権的な存在なのであり、それを拒否できることもまた彼の特権の一部と映ったのではないだろうか。一方、お京はそのような「出世」の世界からは最初から排除されているのだ。

だが吉三はあまりにも幼く、お京の置かれている状況に無配慮である。彼は「上等な運が馬

車に乗つて迎ひに来やすのさ」という言葉に続けて、「だけれどもお妾に成ると言う謎では無いぜ、悪く取つて怒つておくんなさるな」と言う。これに対してお京は「さうさ馬車の代りに火の車でも来るであらう、随分胸の燃える事が有るからね」と返して、「振返りて吉三が顔を守りぬ」とある。「上等な運が馬車に乗つて」という「出世」を意味する言葉は、このようにお京の針の手を止め、吉三の目をまじまじと見させた。「お妾に成ると言う謎では無いぜ」と吉三は付け足すが、お京にとってそれは「御出世」つまり「体を売ってお妾に成る」こと以外のことを意味しなかった。山﨑眞紀子が分析するように、「お京のおかれている環境と年齢を客観的にみれば、針仕事で女独り身の生計を立てている現状を抜け出し、少しでも生活水準を上昇させたいという願いを叶えるための残された手段としては、せいぜいが妾になることぐらいしかない」のであって、しかしそれは嬉しい出世の見込みではない。その苦しみをお京は「火の車でも来るであらう、随分胸の燃える事が有るからね」と訴えた。「火の車」を「胸の燃える事」と言い直すことによって、経済的困窮以上の悩みをお京は吉三に訴えようとしたのではないだろうか。だが吉三はそんなお京の心に気付くことはないのである。

こうして二人はわかれ道に至る。お京が妾になることを決めたのだ。吉三はその選択が許せない。「何時かお前が言つた通り上等の運が馬車に乗つて迎ひに来たといふ騒ぎだから」と明るく振る舞うお京に対し、吉三は「お前その好い運といふはつまらぬ処へ行かうといふのでは無いか」と詰問し、お京は「何も私だとて行きたい事は無いけれど行かなければ成らないのさ」と思わず漏らす。それでも吉三は彼女の苦しみに気づかない。「どんな出世に成るのか知らぬが其処へ行くのは廃(よ)したが宜からう、何もお前女口一つ針仕事で通せない事もなからう［中略］余り情けないでは無いかと吉は我が身の潔白に比べて、お廃しよ、お廃しよ、断つておしまいな」と言い募る。「我が身の潔白に比べて」という言葉が吉三批判として挿入されていることに注目しよう。金のために身を売ることを汚いと思える「潔白」な吉三の立場と、金のために身を売るしかないお京の立場のどちらに作者の共感がこのとき置かれているかは明らかである。お京が困って、「もうお妾でも何でも宜い、どうでこんなつまらないづくめだから、寧その腐れ縮緬着物で世を過ぐさうと思ふのさ」と虚勢を張るのに対して、吉三は「お京さんばかりは人の妾に出るやうな腸(はらわた)の腐つたのでは無いと威張つたのに」と、「不人情」「嘘つき」「欲の深い」と責め立てる。吉三にしてみれば、せっかく姉と見込んだお京に捨てられる気分で深く傷ついたのには違いない。だが彼がまるで汚いものから身を離すかのように「お京さん後生だから此肩の手を放しておくんなさい」と言ったとき、その彼の言葉は世間が遊女や妾に浴びせる冷たい嘲笑と差別と断罪をも含んではいなかったか。山﨑眞紀子は「お京は彼女のどうしようもない無形の孤絶を彼女なりに正面から受け止め、固い決意を持って、さらに一歩深みにはまるように妾の道を選ぼうとする。そこには、現状に対する絶望と言ってもよいあきらめがある。[中略]

吉三はこのようなお京の絶望がわからない。それゆえに、妾奉公を選ぶお京に対して、世間の常識に過ぎないきれいごとの人間観を振りかざして責めることになる」と分析する。身体的な障がいを抱え身寄りもなく、世間で「一寸法師」と謗られている吉三が、別の位相で世間に搾取され冷遇されるお京に対して、彼女のそのやむを得ない「選択」をあたかも彼女の自由意志によるものであるかのように断じて責める。共に社会の弱者であるにもかかわらず、理解を育むことができずに、二人はそれぞれ伝えきれない思いを抱えたまま別れることになる。唐突な物語の最後は、二人の間に横たわる乗り越えられないほどの深淵の表現なのである。

2

明治期最初の女性職業作家である樋口一葉は、常に困窮した女性たちに寄り添った作品を書いた。それは彼女自身が貧しい「女」であるがゆえの苦しみを体験してきたことと深く関係している。女子に教育は不要との母の意見により、11歳で学校教育を終了させられたときのことを、一葉は「死ぬばかり悲しかりしかど」(「塵の中」明治26年8月10日) と書いている。一葉の文学好みに同情的だった父のはからいで、歌塾に入門した一葉はそこで文才を開花させるが、上流階級の子女らの集う塾内で住み込みで働きながら学ぶ一葉は異端的存在だった。盗みの疑いをかけられたこともあるというから、格差から来る差別については身をもって知っていた。菅聡子によれば、一葉という筆名についても「桐の一葉ですか」との問いに対し「葦の一葉ですよ、達磨さんの葦の一葉よおあしがないからと小さい声で、これは内緒ですよといひました」と同門の三宅花圃が記録しているという。「おあし」というのは金のことで、一葉の貧窮状態を表すエピソードである。

一葉は事情によって、当時としては珍しい女性戸主として母と妹を食べさせる必然に迫られた。小説家となって稼ぐことを目指すものの、一時期は十分稼げないために筆を折り、吉原近辺の長屋街に小さな雑貨店を営んだ。私娼の文の代筆などもしていたという。明治維新以来、日本には近代小説によって恋愛至上主義的なイデオロギーが普及すると共に、それを背景にして女性の分断が起こったとされる。すなわち明治政府が導入した二つの制度、家父長制と公娼制度によって、家庭内に囲われる女と性的存在としての役割のみを負わされる家庭外の女が分断されたのだ。一葉が暮らした吉原界隈はまさにその現場であった。遊郭の花魁、酒場の私娼、そして近隣の商店の女たちは、分断の境界線上に生きる女たちであり、一葉はその境界の揺らぎや、娼婦たちに浴びせられる羨望と嘲笑と侮蔑の入り混じった視線、そして彼女たちの悲惨な末路を目撃することとなる。この苦難の時期に、彼女は書くことへの情熱を再確認し「我れは人の世に痛苦と失望とをなぐさめんためにうまれ来つる詩のかミの子なりをごれるものをおさへなやめるものをすくふべきは我がつとめなり」(菅) との言葉を残している。

吉原界隈の経済的発展の源泉として、近代化の波の中で西洋化した道徳観にインモラルな存

在として、もてはやされると同時に蔑まれた花魁たちのありようは、一葉にとって他人事ではなかった。明治27年に一葉は久佐賀という男性に経済的支援を求めたことがあったが、見返りに身体を要求されたのだ。すでに数編の小説を書いてそれなりに名を成していた一葉だったが、この出来事は一葉に、「女」の身体を持つものにとって境界が容易に揺らぐものであることを思い知らせた。『たけくらべ』が好評を博した際も、一葉は「我れを訪ふ人十人に九人まではただ女子なりといふを喜びてもの珍しさに集ふ成けり」と冷めており、自分のことを作家として評価するものは少ないと書いている。若い女性だからともてはやす世間が、違う状況では［ウ］「女」を理由に搾取し侮蔑することを一葉はよく理解していた。

『たけくらべ』は（エ）境界線が引かれる瞬間を見事に切り取った作品と言えるだろう。舞台は吉原遊郭に接する街、物語は生き生きとした街の子供たちの描写で始まる。鳶職の息子で暴れ者の長吉、彼のライバルで高利貸屋の子の正太郎、車夫の息子の三五郎、寺の息子の信如、そして美登利が主な登場人物だ。一番人気の花魁を姉に持つ美登利は、小遣い銭もふんだんで羽振りがよく、男の子たちとも渡り合う強気で美しい少女である。彼女と信如の間に淡い恋模様が描かれたり、正太郎の美登利への憧れが描かれたりする。一見すると大人のどろどろとした社会階層や差別構造とは無関係な、無垢な世界が展開しているかと思いきや、一葉は物語の始めから子供たちの階層構造を丁寧に書き込んでいる。長吉と正太郎は通う学校が違って階級格差を反映しているし、三五郎は家主の息子の長吉にも、金貸しの家の正太郎にも頭が上がらない。信如は寺の息子という立場のため、少し離れた高みに立っている。美登利は花魁の妹ということで、誰からも特別扱いされているが影では哀れまれている。子供たちはみな、親や姉の属する階層によって階級格差のなかにしかと既に埋め込まれているのである。

美登利は物語の冒頭では他の子供達の世界と、姉のいる遊郭の世界を自由に行き来している。彼女は自分が将来遊郭に囲い込まれること、「他の子供たちは、今と同じ場所、あるいは今よりは広い、より良い空間で生きる道があるが、美登利の前にあるのは暗く閉ざされた、卑しまれる空間でしかない」（笹川）ことを未だ認識していない。ところが祭の日に事件が起こる。ライバルグループの両方にいい顔をする三五郎が長吉に暴力を振るわれ、かばった美登利に長吉が「女郎め」「姉の跡つぎの乞食め」と罵り投げた草履が美登利の額を打つ。長吉の言葉には、世間が花魁に浴びせる侮蔑が込められている。信如が長吉をけしかけたと誤解する美登利は、鼻緒を切らせて立ち尽くす信如を見つける。いつもの彼女ならば詰め寄って抗議をするところが、彼女はなぜかそれができずに格子の影に隠れてしまう。格子の向こう側とこちら側、互いの存在を意識しつつ、言葉を交わすことができない二人。美登利は友禅の布を格子の間から信如の方へ投げる。だが信如は動けない。やがて長吉が現れ信如に履物を貸すのだが、この長吉が廓帰りという設定になっていることは注目に値する。格子によって隔てられた内側には遊女になることが運命づけられたもの、外側には遊女を買う立場に立ちうるものが配置されている

のである。

この直後、何かが美登利に起こるのだが、何が起こったかは物語に描かれない。『わかれ道』のときと同じく、「語りえぬこと」が語られているのだ。その日、目撃された美登利は髪を大嶋田に結って絢爛豪華な着物を着ているが、「憂く恥かしく、つつましき事身にあれば人の褒めるは嘲りと聞なされて、嶋田の髷のなつかしさに振かへり見る人たちをば我れを蔑む眼つきと察られて」と描かれている。「うつ伏し臥して物をも言は」ない美登利を心配する正太郎に、彼女は「憂き事さまざまこれはどうでも話しのほかの包ましさなれば、誰れに打明けいふ筋ならず」と言い、さらに「大人に成るは厭やな事」と吐露している。この日、美登利にはこれまで意識していなかったことを、つまり「大人に成る」ことの意味を意識させる出来事が起こったに相違ない。これまで甘受してきた人々の好意や人気といったものが、遊女として既に売られている性的身体としての彼女を担保としており、遊女の稼ぎに群がる吉原界隈の経済構造に依拠したものであること、そこで遊女に浴びせられる眼差しが、美登利がかつて信じていたような賞賛や憧憬だけではなく、嘲りや侮蔑や嫌悪であること、つまり長吉の草履事件が先取りした、吉原の花魁になるということの（オ）暴力性が初めて理解されるような出来事が起こったのだ。この日以来、彼女は街で遊ぶこともなくなり、信如との淡い恋の交流ももう起こらず、信如は修行のために街を出ていってしまう。菅聡子はこの最後を「去って行く者とからめとられた者としての二人の別れ」と評し、高良留美子は「美登利と信如とは決定的に別世界に住む人間に別れてしまったのだ。娼婦と高等教育を受けた僧侶に―。それは廓の内と外、貧富、教育の有無、男女、共同体の差別被差別、聖と賤等、これまでのべてきたすべての二項対立を足しあわせ掛けあわせてもなお足りないほどの、分裂した世界の両極に住む存在である」と評している。境界線が引かれ、饒舌だった美登利が沈黙の世界に引き下がるとき、蔑まれる側にいる者たちの多くが言葉を失うことをこの物語は［カ］雄弁に語っている。こうなることは美登利の「選択」であっただろうか。美登利には選択する機会など一度もなかったのである。

3

お京や美登利の置かれた状況は、［キ］。日本は近年格差が拡大しつつあり、貧困の中で困窮する人の数はどんどん増加している。厚生労働省が 2014 年 7 月にまとめた「国民生活基礎調査」によると、等価可処分所得の中央値の半分の額に当たる「貧困線」に満たない世帯の割合を示す「相対的貧困率」は 16.1％で OECD 加盟 34 カ国中 4 位と高い。中でも 2011 年母子世帯等調査によると母子家庭の貧困率は父子世帯が 2 割台なのに比して 6 割にも及んでいて特筆すべきほど高い。母子世帯の平均年収は、児童のいる世帯平均と比べて 367 万円も低く、母親の 8 割は就労しているものの 5 割は非正規雇用である。これは父子家庭の父親の非正規雇用率が 1 割であることと比べると違いが顕著で、日本の社会構造が女性にとって特に厳しいもので

あることを示している。母子家庭の母親の中には、生活費を稼ぐために水商売や性産業に携わる人も少なくはなく、一葉の『たけくらべ』や『わかれ道』は決して古めかしい時代の話ではない。だが社会階層などの影響を過小評価し個人の能力によって向上していけるとする明治以来のメリトクラシー信奉が浸透し、また（ク）男女雇用機会均等法などの施行によって男女間の不平等が既に除かれていると誤解する人も増えているため、現代日本において貧困母子家庭に注がれる眼はますます冷たくなっている。例えばNHKが母子家庭の貧困問題を取り上げた「ハートネットTV：シリーズ子どもクライシス」（2014年4月放映）には、自己責任論、つまりは離婚したこと、子どもを産んだこと、パート労働（特にいわゆる水商売の女性たちに世間は厳しい）しか見つけられないことなどすべてその女性の選択の結果、自己責任だとして母親を責める意見が多く寄せられた。一方で、女性の性的身体が投資材料とされ経済状況と抜きがたく結び合っている、『たけくらべ』の世界となんら変わっていない現代社会のジェンダー構造の矛盾は置き去りにされている。

先に紹介した現代作家川上未映子は、『たけくらべ』の現代版とでも言うべき小説『乳と卵』で、離婚し水商売で生活費を稼ぐシングルマザーの家庭に寄り添う。母の巻子、娘の緑子、巻子の妹で語り手の「わたし」が登場人物である。言うまでもなく『たけくらべ』の登場人物たちから借りた名前だ。巻子は緑子を育てながらホステスをしているが、豊胸手術を受けるために「わたし」のいる東京に娘と共にやってくる。彼女はジェンダー化されたメリトクラシー、そしてその［ケ］である自己責任論を内在化しており、性的身体を売って経済状況を改善せよという社会からの女性の身体に対する要請をまともに受け止めている。離婚したこと、水商売をしていること、収入が少ないこと、娘が自分に口をきかないこと、その全てを自分の責任と感じてもがき、豊胸手術で少しは収入を増やし状況を改善できるのではないかと考えている。緑子は言葉にならない思いをノートに綴る。そこにはなぜ痛い思いをしてまで豊胸しなければいけないのかという疑問や、授乳によってそうなったことを嘆く巻子に拒絶されたような娘としての思い、自分を育てるために体を壊しながら水商売をしている母を心配する気持ち、彼女自身が思春期にあって性的な身体としてまなざされることへの拒否感、そしてこれらすべてを包括して「女」として生きることへの嫌悪などが綴られる。物語の最後はこの母子がついに胸にためたものを爆発させ、「語りえぬ言葉」をなんとか語ろうとし始めるところで終わる。

一葉のテーマを現代に引き継いで語ろうとする川上が、この物語では母子間の癒しを描いたことはせめてもの救いである。だが現実にはより悲惨な出来事が起こっている。2010年に大阪で起きた二児置き去り死事件は、風俗店で働く母親が幼い子供たちをマンションに置き去りにして餓死させた事件で、センセーショナルに報じられ、加害者である母親に世間の非難が集中した。一方、離婚した夫や両親からの援助の不在や、彼女が親からの虐待被害者であったことなどはあまり注目されなかった。2014年には神奈川のシングルマザーの女性が二人の幼い

子どもをネットで見つけたベビーシッターに預け、うち一人が遺体で発見されるという事件が起こった。この時は見ず知らずのシッターに子供を預けた母親に非難が集中し、彼女が謝罪文を出す事態となった。シングルマザーで複数の子どもを育てながら働くことの困難や、それでも抜け出せない貧困、社会からの孤立、支援の不在などの議論より先に、世間はこの母親の自己責任を問うたのだ。2015年に川崎で中学1年の男子生徒が年上の少年グループに惨殺された事件は記憶に新しいが、ここでも被害者の母親はシングルマザーで、早朝から深夜まで働いていたために子供を守れなかったと謝罪文を出した。後者二つの事件においては、直接の加害者は別にいるというのに、被害者側である母親が謝罪せざるをえないような状況に追い込まれたのは明らかに異常であると共に、弱いものを寄ってたかって虐める社会の暴力性を示している。また川崎の事件では、加害少年のうち二人は移民の母親を持ち、うち一人はシングルマザーだった。移民であったり、シングルマザーであったりする彼女たちやその子供たちが、社会の底辺の貧困層に置かれ孤立している状況を背景にして今回の事件は起こっている。『たけくらべ』の子どもたちがそうだったように、この事件の少年たちも大人たちの社会階層構造を反映させ自らのうちに上下関係を作り出し、暴力で支配を確立させようとした。日本の労働政策が男性中心であることや、家事育児を女性に押し付ける社会のあり方、養育費制度の形骸化、生活保護費受給者のスティグマ化、セーフティネットの欠如、移民政策の不備など、問題は多くあるが、公的資金導入を減らし市場原理を重視するネオリベラリズムの風潮の中で弱者へ寄り添う眼差しが失われ、これらが大きく問題化されないことに本質的な問題がある。その結果、最も弱い立場にいるものたちが虐げられ、あるいは暴力に走り、ときに命を奪われている。その責任を子供を亡くした母親たちに負わせ、彼女たちの（コ）「選択」の結果とするのはあまりにも酷というものである。

今の日本社会は、まさしくアイリス・マリオン・ヤングが「構造的不正義」と呼ぶ状態にある。この不正義の被害者は、しばしば被害を被害と認識できず、「語りえぬ言葉」を抱えたまま罪悪感に追いやられ沈黙する。シェリー・バジェオンは、「そもそも社会的に不利な立場に置かれる原因を、個人が〈正しい〉選択をできるか、あるいはそうする意欲があるかどうかに求める」ことは「根源的な誤認」であり（サ）「〈サクセスフル〉な女性主体が階級と人種を構成要素としている事実」を「覆い隠している」と指摘する。女性の社会活用が叫ばれるようになり、女性ひとりひとりが「〈サクセスフル〉な女性主体」になることを要請される今日の日本社会において、わたしたち個人の「選択」がどれほど個人の自由によるものであるのか、それとも社会構造が産み出したものであるのか、もっと丁寧に精査されねばならないだろう。移民として外国で働くこと、風俗や水商売で働くことは、彼女たちの「選択」によるものなのか。複数のシフトで早朝から深夜まであるいは夜間勤務で働かなければならないことは、彼女たちの「選択」なのか。そもそも離婚すること、シングルマザーとして生きることは彼女たちの自由意志

による「選択」なのか。できるだけ安いシッターを探さざるをえないことは彼女たちの「選択」なのか。これらの問いに向き合うことなく彼女たちに断罪と非難の声を浴びせるとき、世間は無理解によって彼女たちを「語りえぬ言葉」の世界へ追いやるのだ。『わかれ道』のお京に吉三が浴びせた非難の言葉が、彼女を（シ）沈黙の世界へと追いやったように。

**参考文献**


池澤夏樹編『池澤夏樹＝個人編集　日本文学全集 13　樋口一葉　たけくらべ／夏目漱石／森鴎外』、河出書房新社、2015 年

菅聡子『時代と女と樋口一葉』、日本放送出版協会、1999 年

樋口一葉『日本現代文学全集 10 樋口一葉集』、講談社、増補改訂版 1980 年

厚生労働省『平成 23 年度全国母子世帯等調査結果報告』、2012 年

笹川洋子『樋口一葉－物語論・言語行為論・ジェンダー』、春風社、2013 年

新フェミニズム批評の会編『樋口一葉を読みなおす』、學藝書林、1995 年 195-218

高良留美子「無意識の加害者たち －『たけくらべ』論」、『樋口一葉を読みなおす』所収

山﨑眞紀子「すれ違う物語 －『わかれ道』論」、『樋口一葉を読みなおす』、177-194

アイリス・マリオン・ヤング『正義への責任』、岡野八代・池田直子訳、岩波書店、2014 年

Shelley Budgeon, “The Contradictions of Successful Femininity: Third-Wave Feminism, Postfeminism and ‘New’ Femininities”, *New Femininities: Postfeminism, Neoliberalism and Subjectivity*. Eds., Rosalind Gill and Christina Scharff. Palgrave and Macmillan, 2011. 279-292

（余　白）

次の問題（1－40）には、それぞれa，b，c，dの答えが与えてあります。
各問題につき、a，b，c，dのなかから、最も適当と思う答えを1つだけ選び、
解答カードの相当欄をマークして、あなたの答えを示して下さい。

例 (42)　(a)　(b)　■　(d)

1. 『わかれ道』の終わり方についてのこの資料文の筆者の意見に、最も近いものは次のうちどれか。

a. 唐突な終わり方だが、イメージが残像として残るので美しい。
b. 最後の吉三の言葉によって、彼がいかに傷ついたかが表現されている。
c. 唐突な終わり方によって、吉三とお京の後味の悪い永久の別れが表現されている。
d. 完成度は低いが、図らずも作品の雰囲気と合致しているのが絶妙である。

2. この物語の終わりについて筆者が述べる効果と、最も似た効果を持つのは次のうちどれか。

a. 雨上がりの空によりひときわ茜色が際立つ夕日の情景
b. オーケストラ全体による大音量での演奏のあとのクラリネットの独奏
c. 舞台上の俳優の中から主人公を照らし出すスポットライト
d. 演劇のクライマックスシーンでの暗転

3. ［ア］に入る語句として最も適したものは次のうちどれか。

a. いろいろな点で対照的な
b. 共に社会から冷遇される
c. 年齢差のある恋愛を育む
d. 社会の要求する能力を持たない

4. 筆者の言うところの「メリトクラシーのアイロニー」とはどのようなことか。最も適した文章を選べ。

a. 能力主義は平等意識の広まった現代社会で有効な原理だが、一部の社会的弱者を生み出す原理でもあるということ
b. 能力さえあれば成功するというメリトクラシーの言説は、社会的弱者が構造的に置かれている不利益を不可視化しているということ
c. 格差は個人の努力によっていかにでも乗り越えられるが、そのように考える人が現代社会では少なくなってきていること
d. 社会をより良くするはずのメリトクラシーだが、現実には社会はどんどん悪くなっているということ

5. ［イ］に入る語句として最も適したものを以下から選べ。

a. 原型
b. 類型
c. 進化型
d. 典型

6. 現代に流通している童話「一寸法師」と、『御伽草子』所収の「一寸法師」との違いについての筆者の考えに最も近いものは、次のうちどれか。

a. 後者では逆境を乗り越えて出世する主人公という要素が強調され、重いながらも前向きな成功物語として現代版より良い作品である。
b. 後者は子供を捨てるという残酷なテーマを含んでいるので、現代版の方が子供に読ませるのに適している。
c. 後者にあった障がい者差別の要素が現代では消えているが、それは現代における差別の解消を示している。
d. 後者にあった差別や子捨ての暗いテーマが、現代版からは消えてしまっており無毒化されている。

7. 吉三の出世に対する考え方として、筆者の解釈に最も近い文章は次のうちどれか。

a. 出世なんて自分は興味がないと意地を張っている。
b. 自分は出世に縁がないので、傘屋の職人として頑張って勤めようと思っている。
c. 自分は身寄りもなく後ろ盾もいないので、出世は望めないと諦めている。
d. 出世よりも親を見つけるために努力しようと思っている。

8. 「下を向いて顔をば見せざりき」という吉三の行動を描写した部分は、筆者によると何を表現しているとされるか。最も近い文章を選べ。

a. 吉三はお京を家族のように慕うが、お京はそのようには感じていないので、そのすれ違い
b. 吉三の現実逃避をお京は諌めつつ励ますが、吉三にその優しい思いが伝わっていない様子
c. 無条件に愛してくれる家族の存在についての、吉三とお京の意見の差異
d. 親に捨てられた現実が受け入れられない吉三の、お京の拒絶も受け入れられない様子

9. 筆者は「出世」と「御出世」を使い分けているが、それぞれどのようなことを表現しているか。次の中から最も適切な説明を選べ。

a. 出世とは男性が成功し生活や人生の展望が広がることを意味し、御出世は遊女が格を上げ自由を得ることを意味する。
b. 遊女は、御出世を果たしても遊郭を出ることはないが、出世を果たせば外の世界に出ていけるようになる。
c. 出世は一般にそれを果たした人に利するが、御出世はそれを果たした遊女ではなく遊郭に利するものである。
d. 出世は一般的な語句だが、御出世はその語句を使う側の感じる羨望を含んだ表現である。

10. 『たけくらべ』が文芸雑誌『文学界』に連載された時期は、1895年1月から1896年1月にかけてであったが、この時期に日本が関わった国際紛争は次のうちどれか。

a. 日清戦争
b. 台湾出兵
c. 日露戦争
d. 山東出兵

11. 文章中に吉三のことを「ある種特権的な存在」と描写した部分があるが、それはどういうことか。筆者の考えに最も近いものを選べ。

a. 吉三は身寄りがなく不利な立場にあるが、男性であるがゆえに性を搾取される立場には置かれにくいということ
b. 吉三は身寄りがないため、家族の誰にも何も言われずに生きていけるということ
c. 吉三が現実を見ないで生きられるのは経済的にそれほど困窮していないからだということ
d. 吉三はまだ幼いので、理想や夢の中に生きていられるということ

12. 筆者の主張によれば、お京の言う「火の車」という言葉には、経済的困窮の他にどのような意味が込められているか。

a. 人には言えない類の悩みや苦しみを抱えているという意味
b. お京の胸には恋の炎が燃えているという意味
c. やってくる幸運の馬車はすぐに燃えてなくなってしまうだろうという意味
d. 自分の身に起こる幸運をお京は大して嬉しく思っていないという意味

13. 資料文４ページで、お京の言葉を「虚勢を張る」と筆者は説明しているが、それはどういうことか。最も近いものを次の中から選べ。

a. 妾になることを世間は評価しないだろうが、お京は恥じてなどいないという意味
b. 経済的に楽になることをこれからは楽しんで生きようという決意の表れ
c. 妾になることを断れない事情を、幼い吉三から隠しておこうという気持ち
d. 自分でも恥じているが、他にどうしようもないのでせめて悪ぶっているという意味

14. 明治民法（1898 年施行）は、民法と日本の伝統的倫理との整合性をめぐって争われた民法典論争を経て成立した。明治民法の特徴の記述として、適切なものは次のうちどれか。

a. 絶大な戸主権や家督相続制度を中心として、家父長制的な家の制度を存続させるものであった。
b. 日本の伝統を破壊するものとみなされ、「民法出（い）でて、忠孝亡（ほろ）ぶ」と批判された。
c. 夫と妻には、平等に財産管理権を認めるものであった。
d. フランス法学者ボアソナードが中心になって作成した。

15. 日本の歴史において、国政選挙で女性の参政権が初めて行使された年は次のうちどれか。

a. 1925 年
b. 1944 年
c. 1946 年
d. 1950 年

16. ［ウ］に入る語句として、最も適切なものを以下から選べ。

a. 揚げ足をとるように
b. 手のひらを返したように
c. 目から鼻へ抜けるように
d. 尻馬にのるように

17. 下線部（エ）の「境界線」は何と何の間に引かれるものか。以下の中からあてはまらないものを選べ。

a. 家父長制と公娼制
b. 道徳的存在と非道徳的存在
c. 搾取するものと搾取されるもの
d. 良妻賢母と遊女

18. 下線部（オ）の「暴力性」に込められた意味として、最も適切なものを選べ。

a. 花魁になることは、客から身体的な暴力を振るわれる危険を伴っているということ
b. 花魁になることは、美登利の意思に関係なく不条理に決められたことであるということ
c. 花魁になることは、身体搾取と差別の対象になるという構造的暴力にさらされることであるということ
d. 花魁になることは、周囲の人々を暴力にかきたてる異端分子になることであるということ

19. ［カ］に入る語として、最も適切なものは次のうちどれか。

a. 機能的にも
b. 逆説的にも
c. 演繹的にも
d. 弁証的にも

20. 1886年に、一夫一婦制と公娼制廃止を唱える東京婦人矯風会（矯風会）が設立され、1893年には全国組織として日本キリスト教婦人矯風会となり、女性解放運動に貢献したが、この組織に深く関わった人物を選べ。

a. 与謝野晶子
b. 矢島楫子
c. 山川菊栄
d. 平塚らいてう

21. ［キ］に入る語句として最も適切なものは次のうちどれか。

a. 明治時代のことなので、現代ではあまり見られない。
b. 現代においても決して特殊なものではない。
c. 明治時代においては特殊な女性の話であった。
d. 現代では男女ともに等しく置かれる状況でもある。

22. 母子世帯の貧困率が父子世帯のそれと比較して高いことの理由として、<u>あてはまらない</u>ものを選べ。

a. 子育てのために離職する女性が多いなど、女性がキャリアよりも家庭を優先する風潮が強いため
b. 社会の育児支援政策やひとり親支援政策が男性により手厚い制度であるため
c. 男性を家計の大黒柱とする思想が強く、女性が家計を支える前提の政策がほとんどないため
d. 生涯雇用が典型とされ、中途採用や再就職の制度が整っていないため

23. 「天は自ら助くる者を助く」と主張し、明治時代の立身出世の風潮を代表する著者と著作の組み合わせはどれか。

a. 福沢諭吉『学問のすすめ』
b. サミュエル・スマイルズ『西国立志篇』
c. 中江兆民『三酔人経綸問答』
d. 仮名垣魯文『安愚楽鍋』

24. 筆者の考える「明治以来のメリトクラシー信奉」に合致する考え方はどれか。

a. 個人が達成した業績は、能力によるものではなく、むしろ努力の成果である。
b. 個人の達成した業績は、個人の能力と家庭環境の影響という二つの複合的要因に左右される。
c. 個人が達成した業績は、純粋に能力と努力の産物とはいえず、むしろ生まれ育った社会的境遇の影響を受けている。
d. 個人が達成した業績は、能力と努力の産物であり、生まれ育った社会的境遇のいかんに左右されない。

25. 国連の総会で 1979 年に採択された女子差別撤廃条約に批准するために日本が 1985 年に制定した法は次のどれか。

a. 男女共同参画社会基本法
b. 育児・介護休業法
c. 勤労婦人福祉法
d. 男女雇用機会均等法

26. 人間だれもが人間らしく生きる権利（生存権）を保障するのは、日本国憲法のどの条文か。

a. 第 9 条
b. 第 11 条
c. 第 15 条
d. 第 25 条

27. 1919年に制定され世界の範となったドイツ・ワイマール憲法には、「経済生活の秩序は、すべての人間たるに値する生存を保障する目的をもつ正義の原則に適合しなければならない」とする条文がある。この条文はいかなる権利の保障に関するものか。適切なものを次の中から選べ。

a. 社会権
b. プライバシーの権利
c. 人格権
d. 経済的自由権

28. 下線部（ク）「男女雇用機会均等法などの施行によって男女間の不平等が既に除かれていると誤解する人」が抱きがちな見解に適合するのは次のうちどれか。

a. 男女間の不平等と見えるものは、実は個人の能力の違いにすぎない。
b. 男女間の不平等は、直接差別の産物である。
c. 男女間の不平等に見えるものは、実は能力の性差を反映している。
d. 男女間の不平等は、間接差別の産物である。

29. 資料文８ページの「現代社会のジェンダー構造の矛盾」とはどのようなことか。

a. 女性が直面する苦境が女性自身の自発的な選択に由来することを認めつつも、その自己責任を曖昧にすること
b. 女性が直面する苦境が社会的要因に影響されることを認めつつも、それを自己責任に帰すること
c. 女性に特徴的な苦境を性別に関係ない個人的選択の問題とみなしながらも、苦境からの脱出が女性の性的特徴の活用を強いること
d. 女性が直面する苦境を女性に固有の問題として認識しながらも、性的特徴を売り物にすることを道徳的に断罪すること

30. ［ケ］に入る語句として適したものを次のうちから選べ。

a. 延長
b. 原因
c. 帰結
d. 要素

31. 「豊胸手術」がこの資料文の文脈で果たしている機能として、あてはまらないものを選べ。

a. 画一的で多様性を認めない美の基準とその影響力への批判
b. 貧困女性に残された唯一の財が身体であるという現実の象徴
c. 自己責任で肉体を危険にさらす女性が内面化している、社会の要請のメタファー
d. 性的魅力の増大が金銭で確保できるとする社会への批判

32. 「ジェンダー化されたメリトクラシー」とはどのような考え方か。次の中から最も近いものを選べ。

a. 身体の性的特徴を、正当な報酬を得るための重要な能力ないし資本として活用すべきである。
b. 男性は男性らしい仕事に就き、女性は女性らしい仕事に就くべきである。
c. 能力主義の立場は、性別を問わず中立的な評価基準である。
d. 男性と女性は、業績評価を受ける際にそれぞれ異なる基準の適用を受けるべきである。

33. 「ネオリベラリズムの風潮」として著者が理解する政治思潮に最も近いのは、次のうちのどれか。

a. 政府の公的支出を増やすことで社会保障を充実させつつ、市場経済には規制を通して積極的に介入して問題を解決する。
b. 政府の公的支出を縮小させて社会保障費の公的負担を減らしつつ、市場経済には規制を通して積極的に介入して問題を解決する。
c. 政府の公的支出を増やして社会保障を充実させつつ、市場経済にたいしては規制緩和を通じて問題の解決を図る。
d. 政府の公的支出を縮小させて社会保障費の公的負担を減らしつつ、規制緩和された市場経済の波及効果に期待する。

34. 下線部（コ）に「選択」とあるが、以下の文章のうち、ここことは異なる「選択」の使い方をしているのはどれか。

a. 巻子の豊胸手術を受ける選択
b. 移民女性の水商売で働く選択
c. 一葉の再び小説家になる選択
d. お京の妾になる選択

35. 「構造的不正義」として筆者が考えるものに合致する事例は次のうちのどれか。

a. 特定の個人や組織が、特定の属性をもつ個人や集団にたいして不正な行為をおこなうという事例が常態化していること
b. 特定の個人や組織が、不特定多数の個人や集団にたいして不正な行為をおこなう事態
c. 多数の個人や組織の行為の集積によって作り出される社会の仕組みが、特定の属性をもつひとびとに不利益を強いる事態
d. 特定の個人や組織の行為の集積によって作り出される社会の仕組みが、不特定多数のひとびとに不利益を強いる事態

36. 下線部（サ）「〈サクセスフル〉な女性主体が階級と人種を構成要素としている事実」の意味として、最適なものは次のうちどれか。

a. 現代社会における女性の成功や失敗は、努力しても変えられない要素によって決まる部分もあるということ
b. 現代社会において成功する女性は、階級と人種を超越することを求められるということ
c. 現代社会における女性にとって、属する階級と人種によって成功の意味が異なるということ
d. 現代社会において成功する女性は、特定の階級と人種を持つ人に限られるということ

37. 日本国憲法の第24条は、家庭生活における男女の平等を規定しているが、この条項の記述に含まれないものはどれか。

a. 夫婦は同等の権利を有する。
b. 結婚は、両性の合意のみに基づいて成立する。
c. 家庭生活に関する法律は、男女の本質的平等に基づく。
d. 性別による差別は、法の下の平等の観点から許されない。

38. 「わたしたち個人の「選択」がどれほど個人の自由によるものであるのか、それとも社会構造が生み出したものであるのか、もっと丁寧に精査されねばならないだろう」と論じる筆者の意図に合致する見解はどれか。

a. 個人の選択による結果の範囲を明確化して、自己責任をもっと追求できるようにすべきである。
b. 安易に自己責任を追求するのではなく、個人の選択に及ぼす社会構造の影響を十分考慮すべきである。
c. 社会構造の影響を明確化しようとすると、自己責任の範囲が狭まってしまうという矛盾が生じる。
d. 個人の選択による結果を明確化しようとしても、自己責任を問うことは原理的に不可能である。

39. 下線部(シ)の「沈黙」の説明として、最も適しているのは次のうちどれか。

a. 何も言うことが存在しない無としての沈黙
b. 語り手の継続した深い思考を示す沈黙
c. 批判と非難によって自由な発言を禁じられることによる沈黙
d. 言語外の相互コミュニケーションの可能性を示す沈黙

40. この文章のタイトルとして、最も適しているのは次のうちどれか。

a. 樋口一葉の作品世界
b. 貧困がもたらすもの
c. メリトクラシーの変遷
d. 彼女たちの「選択」